岩手大学文化論叢　第10輯 (2021. 2) 11 ～ 25

# 岩手県内の樺太引揚者のファミリーヒストリーその１　盛岡市編

麦　倉　　哲*

## 1　研究の目的と方法

太平洋戦争後に，樺太から岩手県へと引揚げてきたファミリーは，樺太の地でどのように定着し，またどのような経過を辿り引揚げ，岩手県へと落ち着いたのであろうか，そしてまた，その後さらにどのようなファミリーのヒストリーを辿ったのであろうか。筆者らは2010年9月から，樺太引揚者に焦点をあてファミリー・ヒストリー調査を開始した。方法は，機縁法による聴き取り調査（個別面接質問聴取法）である。

この調査に先立って，青山アパート住民を対象とした調査を開始したところ，入所者の中に樺太からの引揚げ経験者が少なからず含まれていることが分かった。青山アパートは，盛岡市で最も古く，調査の時点で建て替え期を迎えていた老朽化した公営住宅である。そのために，家賃設定も安いが，風呂設備がついていないなど，時代の変遷に対応できていない面もあった。青山アパートには歴史があり，入居者のファミリーにも歴史があることがわかった。第二次大戦後の1946年に，政府の要請を受けた岩手県は，兵舎を仕切って，国外戦地からの無縁故による引揚者を受け入れた。それが青山アパートの前史である。劣悪な居住条件の兵舎は，その後，住宅改善事業によって団地化された。それが，盛岡市営の青山アパートである。無縁故の引揚者には主に，満州からの引揚者と樺太からの引揚者があったが，筆者らは当面，樺太からの引揚者に焦点を絞って研究を進めることとした。

岩手県には相当数の，樺太引揚者ファミリーが居住したと想定できるが，そうしたファミリーの名簿があるわけではない。機縁法を用いた理由はここにある。青山アパートの聞き取りで知り合った方がたや，過去において新聞その他のメディアで取り上げられた人たちをさらに人づてでたどって調査を進めたのである。

さて聴き取りの調査内容は，引揚げファミリーの，Ａ：樺太への定着の過程（居住地，家族，地位・職業，食生活，その他），Ｂ：戦争がもたらした混乱と引揚げの過程，Ｃ：岩手県を落ち着き先とした理由（盛岡市等に居住した理由），Ｄ:兵舎跡での生活（仕事，食生活など），Ｅ:市営住宅ができたときのこと，Ｆ:その後のファミリーの転機や推移，Ｇ:現在の生活（健康状態，収入，家賃，食費，生きがい・趣味ほか），Ｈ：その他（行政への要望など）である。聴き取った内容を時間順に，①プロフィール，②終戦までの樺太での生活，③終戦から引揚げまで，④引揚げのとき，⑤帰国後の５段階に整理し，ドキュメントとして記録化した。

ロシアとの戦勝と敗戦の歴史に翻弄された樺太引揚者は，故郷を喪失した無縁故の権利弱者

＊　岩手大学教育学部社会学研究室

や居住弱者として，また生存の基盤を喪失したファミリーとして，その後，苦難の戦後を生きていく。国内外の政略の顛末の影響を最も強く受けた一団である。敗戦当時の1945年や引揚げ時期の1947年，1948年の当時に10代であった当事者ファミリーは，本調査時点（2010年）で70歳代後半から80歳代に達していた。

## 2　樺太島への入植と引揚げ

### （1）北方先住民と日本・ロシア国境線

樺太島は，江戸時代には，日本とロシア（以下「日ロ」）がそれぞれに入植した島であったが，歴史をさかのぼると，元もとこの島の南方は，アイヌ民族やニヴフやウィルタなどの先住民が生活を営んできた土地である。

北海道よりも少し小さいくらいの広大な島の人口は，1875年の千島樺太交換条約成立までは2,000人台であったとされる。交換条約により全島がロシア領となったが，日ロの国境とは関係なく，北方先住民やアイヌ民族に加えて，その後移住した和人は暮らし続けた。一方ロシアは，流刑地として活用した。

1905年，日露戦争終結のために締結されたポーツマス条約により，北緯50度を境に，北をロシア（その後，革命によりソビエト社会主義人民共和国（以下「ソ連」）），南を日本の領土として国境線が引かれた。明治政府は，北緯50度を境に南樺太を日本領とし樺太民生署を置き，1907年には樺太庁が設置される。1908年に26,393人（樺太庁統計書）であった人口は，1940年の国勢調査では414,891人と飛躍的に増加した。

表1　日本統治時代の樺太（南樺太）の人口の変遷＊

| 調査年月日 | 人口 | 出典 |
|---|---|---|
| 1908年（明治41年）12月31日 | 26,393 | 樺太庁統計書 |
| 1913年（大正　2年）12月31日 | 44,356 | 樺太庁統計書 |
| 1918年（大正　7年）12月31日 | 79,795 | 樺太庁統計書 |
| 1920年（大正　9年）10月　1日 | 105,899 | 国勢調査 |
| 1925年（大正14年）10月　1日 | 203,754 | 国勢調査 |
| 1930年（昭和　5年）10月　1日 | 295,196 | 国勢調査 |
| 1935年（昭和10年）10月　1日 | 331,943 | 国勢調査 |
| 1940年（昭和15年）10月　1日 | 414,891 | 国勢調査 |
| 1944年（昭和19年）　2月22日 | 391,825 | 人口調査 |

＊『樺太庁施政三十年史 上巻』，88-89頁

1941年に太平洋戦争がはじまり，その終戦間近の1945年，ソ連はヤルタ協定に基づいて南樺太に侵攻を開始（8月11日）し，8月22日に日ソ停戦協定が成立するまで侵攻を続けた。太平洋戦争開始前に居住していた約40万人の住民のうち，ソ連侵攻後に北海道方面へ緊急疎開した者は，約10万人とされる。約30万人は，島に残された。

### （2）岩手県への引揚者

樺太からの岩手県への引揚者については，岩手県が出した『岩手県戦後処理史』に記録されている。太平洋戦争後の，各種の戦没者，傷病者，各地からの引揚者への岩手県の対応の経過や，対象者数の推移について，各種統計により大まかに記録されているのである。それによると，国外からの岩手県への引揚者については，1945（昭和20）年から1950（昭和25）年の５年間の合計で22,006人であることがわかる。

引揚者の住所地となった市町村は，人数の多いところから，第一に盛岡市，次いで花巻市，水沢市，一関市，宮古市，北上市，釜石市，江刺市と続く。盛岡市と花巻市が突出しているのは，両市が岩手県における，無縁故者の受け入れ先の代表格であったからである。とくに，盛岡市は，青山地区が，軍の駐屯地であったために，終戦により空き舎となった兵舎が活用された。

引揚者の総数が300人以上と多い自治体の中で，樺太・千島・ソ連からの引揚者の比率が高いのは，岩手町，久慈市，盛岡市，一戸町である。全体の平均が40.2％であるのに対して，この平均値を上回っているのが，この４つの自治体なのである。樺太引揚者の人口の中で４位あたるのは岩手町（全体では17位）である。６位の陸前高田市（全体の９位），そして受け入れ者のすべてが樺太引揚者の田野畑村などが注目される。

**表２　引き揚げ方面別引揚者数＊**

| 市町村 | 満州 | 満州順 | 中国 | 樺太千島ソ連 | 樺太順 | 朝鮮 | 台湾 | 南方 | 計 | 合計順 | 樺太比率 | 満州比率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 盛岡市 | 1451 | 1 | 675 | 1986 | 1 | 413 | 238 | 101 | 4864 | 1 | 40.8% | 29.8% |
| 花巻市 | 572 | 2 | 180 | 512 | 2 | 98 | 69 | 31 | 1462 | 2 | 35.0% | 39.1% |
| 水沢市 | 316 | 6 | 80 | 341 | 3 | 147 | 67 | 22 | 973 | 3 | 35.0% | 32.5% |
| 一関市 | 441 | 3 | 123 | 168 | 7 | 151 | 53 | 5 | 941 | 4 | 17.9% | 46.9% |
| 宮古市 | 390 | 5 | 141 | 202 | 5 | 126 | 21 | 40 | 920 | 5 | 22.0% | 42.4% |
| 北上市 | 431 | 4 | 105 | 168 | 8 | 89 | 63 | 10 | 866 | 6 | 19.4% | 49.8% |
| 釜石市 | 294 | 8 | 75 | 144 | 11 | 268 | 37 | 36 | 854 | 7 | 16.9% | 34.4% |
| 江刺市 | 299 | 7 | 93 | 104 | 17 | 74 | 21 | 11 | 602 | 8 | 17.3% | 49.7% |
| 陸前高田市 | 215 | 12 | 88 | 179 | 6 | 44 | 17 | 8 | 551 | 9 | 32.5% | 39.0% |
| 花泉町 | 206 | 13 | 47 | 115 | 16 | 89 | 50 | 1 | 508 | 10 | 22.6% | 40.6% |
| 福岡町 | 222 | 11 | 39 | 161 | 10 | 55 | 12 | 6 | 495 | 11 | 32.5% | 44.8% |
| 大東町 | 258 | 9 | 25 | 91 | 19 | 63 | 23 | 5 | 465 | 12 | 19.6% | 55.5% |
| 前沢町 | 186 | 15 | 24 | 137 | 13 | 42 | 48 | 11 | 448 | 13 | 30.6% | 41.5% |
| 紫波町 | 191 | 14 | 84 | 74 | 21 | 21 | 16 | 16 | 402 | 14 | 18.4% | 47.5% |
| 金ヶ崎町 | 125 | 21 | 20 | 135 | 14 | 48 | 17 | 1 | 346 | 15 | 39.0% | 36.1% |
| 一戸町 | 123 | 23 | 23 | 140 | 12 | 41 | 15 | 4 | 346 | 16 | 40.5% | 35.5% |
| 岩手町 | 85 | 29 | 33 | 204 | 4 | 14 | 4 | | 340 | 17 | 60.0% | 25.0% |
| 山田町 | 124 | 22 | 43 | 124 | 15 | 31 | 6 | 3 | 331 | 18 | 37.5% | 37.5% |
| 遠野市 | 176 | 16 | 30 | 38 | 35 | 58 | 15 | 7 | 324 | 19 | 11.7% | 54.3% |
| 久慈市 | 96 | 28 | 18 | 164 | 9 | 33 | 4 | 7 | 322 | 20 | 50.9% | 29.8% |
| 合計 | 8852 | | 2573 | 6603 | | 2533 | 987 | 458 | 22006 | | 30.0% | 40.2% |

岩手県編『援護の記録：岩手県戦後処理史』岩手県，1972年

＊表中の「水沢市」「江刺市」「前沢町」は2006年に胆沢町・前沢町・衣川村と合併して奥州市に，「花泉町」「大東町」は2005年に千厩町・東山町・川崎村・室根村と共に一関市に，「福岡町」は1972年に金田一村と合併して二戸市となった。

引揚者が入居した当時の兵舎は，集団生活の相部屋であった。宿舎は，世帯単位で引揚げてきた引揚家族のために簡易的に仕切ったもので，トイレ，炊事場，風呂等はすべて共用であった。さらには，馬舎も活用されたので，決して，質を伴ったものとはいえなかった。

満州からの引揚者と樺太からの引揚者とでは，引揚げ前に住む環境やなりわいが異なっていた。満州引揚者は，市街地に住む者が多いのに対して，樺太の場合は市街地の住民も含まれるが，漁業や農業に従事している者が多かった。それゆえ，無縁故で引き上げる樺太引揚者にとっ

ては，市街地で職探しをするよりも，農業に従事できる，未開拓の原野を，新規の開拓地として望んで移住した者も少なくなかったと思われる。

表３　1947（昭和22）年と1948（昭和23年）の引揚者の割合の高い岩手県内市町村＊

| 市町村 | 1945 | 1946 | 1947 | 1948 | 1949 | 1950 | 合計 | 22年23年比率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 田野畑村 | | | | 86 | | | 86 | 100.0% |
| 九戸村 | 0 | 20 | 28 | 27 | 1 | | 76 | 72.4% |
| 岩手町 | 30 | 104 | 146 | 57 | 3 | | 340 | 59.7% |
| 久慈市 | 51 | 103 | 109 | 55 | 3 | 1 | 322 | 50.9% |
| 盛岡市 | 587 | 2,108 | 672 | 1,490 | 5 | 2 | 4,864 | 44.4% |
| 大野村 | 13 | 21 | 13 | 13 | 1 | 1 | 62 | 41.9% |
| 種市町 | 4 | 41 | 19 | 14 | 1 | | 79 | 41.8% |
| 金ヶ崎町 | 53 | 144 | 32 | 112 | 4 | 1 | 346 | 41.6% |
| 浄法寺町 | 11 | 41 | 12 | 26 | 1 | 1 | 92 | 41.3% |
| 松尾村 | 16 | 56 | 36 | 13 | | | 121 | 40.5% |
| 葛巻町 | 10 | 48 | 15 | 24 | | | 97 | 40.2% |
| 合計 | 3,096 | 11,643 | 3,547 | 3,526 | 169 | 25 | 22,006 | 32.1% |

出典：岩手県編『援護の記録：岩手県戦後処理史』岩手県，1972年
＊表中の「大野村」「種市町」は2006年に合併して洋野町となり，「浄法寺町」は2006年に二戸市（初代）と合併し新設二戸市となり，「松尾村」は2005年に，西根町・安代町と合併して八幡平市となる。

樺太からの無縁故の引揚者の引揚事業は，1947（昭和22）年と1948（昭和23）年に集中している。これは，日本とソ連との関係で，引揚げ事業の準備が整うまでのあいだ，公式の引揚げができなかったことによる。このことから，引揚者の人数が，この２年間に集中している。自治体に注目すると，表３のようになる。

1947年と1948年の引揚者数は全体の32.1％である。注目されるのは，田野畑村で，この２年間にのみ，引揚者を受け入れている。開拓村への入植として受け入れたと思われる。第２位の九戸村や３位の岩手町も，この２年間の受け入れ人数の比率が高い。岩手町は，開拓集落への樺太引揚者の入植がこの数値に示されていると思われる。

全体として引揚者の数が多い都市部とは異なって，田野畑村，九戸村，岩手町などの，農山漁村部が上位にあるのは，注目に値する。樺太からの，とくに無縁故の引揚者は，岩手県に新天地を求め，先代，２代前の祖先が，樺太へ入植したのと重ね合わされるような，再び新たな志を立てて，開拓農村への入植を志したと思われるのである。

今回の調査で対象とした，盛岡市に住所地を求めた家族と，岩手町の開拓地に住所地を求めた家族たちの，２つの流れを確認出来たが，岩手町に活路を求めた人たちに，樺太からの無縁故の引揚者の一つの傾向性がうかがえるのである。

### （３）引揚者数における「満州・大連」と「樺太・千島」の差異

全国の引揚者　235万７千人なかで，樺太・千島は，４分類でいちばん少ない。非常に多いのは，満州からの引揚者である。しかしながら，岩手県に目を向けると，満州に次いで樺太・千島からの引揚が多い。県内引揚者の総数において，満州と大きな違いはない。これは，岩手

県が，無縁故の引揚者を積極的に受け入れたことによる。

引揚者235.7万人のうち，岩手県に引揚げてきた人数は，2万2,006人で，全体の１パーセントに満たない。しかし，樺太関係に限ると，29.3万人のうち，6,603人となり，その比率は，全体での比率を２倍以上上回る。

**表４　未引揚者数の推定**

＊単位 千人

| | 終戦時数 | 引揚数 | 未引揚数 |
|---|---|---|---|
| ①ソ連本土 | 0 | 470 | |
| ②満州・大連 | 1,945 | 1,271 | |
| ③北朝鮮 | 410 | 323 | |
| ④樺太・千島 | 371 | 293 | |
| 計 | 2,726 | 2,357 | 369 |

＊一般邦人をふくむ，1946年～1950年の期間の引揚者数

表４により，終戦時の在外地の人数を比べると，未引揚者数が計算できるが，全体で36.9万人の未帰還者がいたことになる。このなかで，「樺太・千島」に限ってみると，その差は8万２千人に及ぶ。その理由として考えられるのは，ソ連への抑留者となったことが第一である。そして第２に，終戦間近のソ連の参戦に対応して，緊急疎開して帰還した人々がこれに含まれているのではないかということである。つまり，実際は，緊急避難し北海道へ着いた人が含まれるのではないかと思われる。

日本政府（厚生省）は未帰還者についての調査を実施した。樺太・千島については，表５に示した。それによると，調査時点での対象者数は9,535人であった。これら一連の数字の差異については解明されたとは言えず，精査が残されている。戦後は終わっていないのである。

**表５ 未帰還者調査集計表（樺太・千島，未帰還者調査）＊**

| 樺太・千島 | 人　数 |
|---|---|
| 存　命 | 2,545 |
| 不　明 | 874 |
| 死　亡 | 5,934 |
| 合　計 | 9,353 |

＊厚生省「援護局編『引揚げと援護30年の歩み』（1977年）

「樺太・千島及び周辺海域での戦没者」について政府は約1万8,900人としている。樺太関連で概数で明らかとなっているのは，①日本軍戦死者700人，日本軍行方不明者2,000人，民間人の戦闘被害死者3,700人，緊急疎開船での殉難者1,700人などである。残るは抑留者の死者なのかどうか，子細な検討が依然残されている。

終戦（敗戦）の時点では，存命していたものの，帰国までの期間に，死亡した例も少なくない。ソ連への抑留者の深刻な例が記憶されるが，兵士以外でも，帰国の途上で死亡した者，帰国途中の危険な帰国環境の中で死亡した者，直ちには帰国できずに帰国待ちの期間に死亡した者，終戦後の敵の攻撃により死亡した者，また敵の捕虜になってはいけないという洗脳ともいうべ

き，事実上の精神の支配による自決への事実上の強迫観念により，まるで玉砕のごとく自決した例，帰国路の危険な道のりや移動手段のリスクにより，事故死，傷病死した例など，引揚者になる前に，亡くなった国民の数が，非常に多いことがわかる。

**表６　樺太・千島関連の戦没者数＊**

| 樺太・千島関連の戦没者 | 人　数 |
|---|---|
| ①日本軍戦死者 | 700 |
| ②日本軍行方不明者 | 2,000 |
| ③民間人 | 3,700 |
| ④緊急疎開船での殉難者 | 1,700 |
| （上の①～④の死者を含む）<br>樺太・千島及び周辺海域での戦没者総数 | 18,900 |

＊厚生省「援護局編『引揚げと援護30年の歩み』（1977年）

戦後75年を経た現在にいたっても，終戦前に樺太にいた，約40万人の南樺太住民が戦中および戦争との関係で戦後に，どのような人がいったい何人どのようにして亡くなったのかについての，正確な調査は終わっていない。これまでの各種の戦闘の結果や，脱出者や引揚者の状況に関する記録やドキュメント，そして本調査による戦争体験談などから，戦中・戦後の，戦争関連の死は次のように整理できる。

Ａ「戦闘による敵の攻撃による兵士の死」，Ｂ「敵による住民の殺人」，Ｃ「緊急疎開船への攻撃による死」，Ｄ「敵による強姦殺人および関連致死」，Ｅ「集団自決等による自死」，Ｅ「日本軍や住民による朝鮮人等の殺害」，Ｆ「引揚げ中の事故死」などである。

樺太におけるソ連の侵攻に伴う戦争において，数多くの戦闘員が戦死し，一般住民が戦没した。

ポツダム宣言受諾，天皇の玉音放送後も続いた戦闘として，双称される沖縄戦および樺太・千島での戦闘で共通するのは，一般の住民が多数，戦争の犠牲になっているということである。戦闘員，兵士の死と比べて，現地住民の死の数が多いという特徴も共通している。また他方で，投降した兵士として抑留された後に死亡するという戦争犠牲者の数も膨大である。兵士として捕虜とされた者がこうした過酷な状況を強いられたのである。兵士の中には，緊急疎開により戦死からも抑留からも逃れることができた立場の者と，島での戦闘に参加し戦死した者と，捕虜として拘束され抑留された者とがいる。抑留された者の中には，戦況が悪化する中で，現地召集されその結果，抑留された住民も含まれている。

樺太･千島の戦闘による戦死者や抑留後の死者を考えても，戦争における命の存続において，命の格差が鮮明に横たわっている状況がうかがえる。こうした点での子細な検討が必要であるが，こうした検討はいまだ十分になされていない。命の格差の視点から戦争被害を究明しなければ，ようするに，戦中はみな等しく労苦を経験したという苦労話に終わってしまうのである。

## ４　無縁故の引揚者

### （１）数々の苦難を経ての引揚げ

樺太からの引揚者は，戦前に樺太に住所をおいていた者のうち，①ソ連との戦闘により戦死することなく，②ソ連の民間人攻撃により戦没することなく，③日本軍や日本人により殺害されることなく，③ソ連兵による強姦等によって死に至らしめることなく，④集団自決のようなかたちで（半強制的な）自死に至らしめられることなく，⑤軍関係として捕虜収容や抑留されることなく，⑥引揚途中の数々の危険により事故死することなく，生き残り，函館引揚局にたどりついた人たちのことである。

こうした引揚者のうち，無縁故として，受け入れ先を岩手県とした家族の世帯員が，聴き取り調査の対象者である。引揚者の支援として，政府や受け入れの都道府県が実施したのは，①住居，というより入居寮の提供，②生活支援の現物の支給，そして，③職業紹介支援などであった。

2011年，岩手県岩手郡岩手町の旧開拓集落へ聴き取りに行った時に，筆者は，引揚者も，戦災という災害の被災者といえるので，筆者がその当時，東日本大震災被災者への聴き取り調査をしていることも話題にしたところ，開拓集落の入植者である，樺太引揚者の対象者は，次のように本音を述べた。「今の被災者はいいよねえ，いろいろな支援があって，自分らにはほとんどなにも支援がなかった。」というのである。

そうした第一声から，開戦そして戦後に引揚げてからこのかた，いかに苦難の連続であったかの一端がうかがえた。

岩手県は，全都道府県のうち北海道に次いで多くの樺太引揚者を受け入れてきた。太平洋戦争の敗戦とソ連の参戦，そして敗戦の結果の一つとして，南樺太のソ連領化により，南樺太に定住していた日本国民は，引揚げを余儀なくされた。函館市史によれば，南樺太と千島から公式に引揚げた者は，東日本で唯一引揚げ援護局の設置された函館市を経由して，日本に帰国した。引揚げは1947（昭和22）年から25年までの３年間に集中している。

満州ほかからの引揚者との大きな違いの第一は，樺太引揚者においては，無縁故者が多いこと，そして第二に，引揚げの時期が，満州よりも遅いことである。この２点からみても，樺太からの引揚者の苦難の様子がうかがえる。無縁故者が多い理由は，日本本土から樺太への移住・入植した期間が長いからである。主として，日露戦争終結後に移住・入植した者が，海を渡ってから，太平洋戦争の終結までに，２世代，３世代までに及んでいるファミリーが少なくない。それ相応に樺太に定着したがゆえに，移住・入植した前の本土との関係は希薄になっているということである。このことは裏を返せば，本土との関係が相対的に希薄になっている半面，樺太における生活の基盤が強くなっていたということである。そうしたファミリーが，樺太における基盤を剥奪されて，引揚げざるをえないという落差の大きさを，樺太引揚げファミリーの多くは経験していると想像できる。

一方，引揚げ時期が遅いということは，外国権力の統治下，ソ連の統治下に長く置かれ，そのために，母国が保障すべき権利やサービスを剥奪される環境に置かれたということである。

### （２）樺太引揚者と岩手県盛岡市青山町

岩手県盛岡市青山町は，第二次大戦が終わって，軍隊が撤退したあと，1946年に出来たまちである。日本国と岩手県は，軍都であることから脱した地に，戦争で追われた国民を迎え入れたのである。青山町は，戦後の引揚者の町であるということを発祥としている。

樺太からの引揚げは，1946年（昭和21年）12月からはじまり，1947年と1948年にピーク

を迎え，1949年7月まで行われ，総数は約28万人に及ぶ。函館市史によれば，千島・樺太からの引揚者およそ30万人（千島・樺太で29万2,749人，樺太に限ると27万9,356人）のうち，千島・樺太からの無縁故者は，10万9,674人に及び，そのうち，6万0,116人が，函館市から他出した。

日本国政府は，こうした無縁故者を引き受ける都道府県を募った。とはいえ，引揚者にとって，行き先の居住地や条件は，限られたもののようであった。函館からの移転先の第一は，北海道で，第二が岩手県，以下東北の各県が占めることになった。

岩手県内の受け入れ場所は，５か所であった。当時の衆議院特別委員会記録によれば，

「函館に到着した引揚者にはこの無縁故者がきわめて多かったのである。函館引揚援護局では彼らの居住地の斡旋に大きな力を注いだが，その大多数は，住み慣れた樺太や千島と気候風土の類似した北海道への居住を希望した。しかし北海道のみで彼らの希望をすべて受け入れることは不可能であったため，他府県にも協力を求めなければならなかった。その結果，無縁故者10万9,674人のうち，その約55パーセント強に当たる6万115人が函館から新たな居住地に移住したが，その移住先は，北海道が4万2,197人で移住者の70.2パーセントを占めてもっとも多く，ついで岩手県，青森県，福島県，山形県，宮城県，秋田県，徳島県の諸県に移住した。つまり大部分は北海道を中心として東北6県に移住したわけである。」（「函館引揚援護局史』）

### （3）戦争の影響と戦後の生活困窮

このうち樺太から岩手県への引揚者は，戦後，応急住宅として，主として引揚者用に提供された兵舎を改造した壕舎であった。盛岡市青山地区は，戦後，引揚者（満州からの引揚者，樺太からの引揚者）の町となった。

一見，無関係ともみえる，樺太と青山との間に，意外なほどに共通する点が多い。1900年代当初から太平洋戦争終戦直後までの，樺太と盛岡市青山地区の歴史は，戦争と軍隊に彩られている。樺太入植がはじまったのは，1905年の日露戦争の勝利の結果であり，引揚げも敗戦の結果である。盛岡市青山が開拓されたのは，岩手県と盛岡市が，日露戦争後に，日本軍を誘致し，工兵隊，騎馬隊の駐留基地にしたところからはじまる。そして，青山地区は，第二次大戦後の1946年に，兵隊の撤収により，大きな転機を迎える。

空き家となった兵舎を部分的に改修して，無縁故の引揚者の住居として提供することとなったからである。こうして，兵舎跡地に，２丁目に青山寮，３丁目に岩鷲寮が，順次開設された。無縁故の引揚者として入所したのは，まず，満州からの引揚者で，次いで，１年遅れて，主として岩鷲寮に，樺太引揚者が順次入所していった。

樺太からの無縁故の引揚者のために，政府は，住宅をあっせんしたが，戦争の困難辛苦の中で引揚げてきた樺太からの無縁故の引揚者を待ち受けていたのは，とても貧しい住宅生活であった。

「引揚者総世帯数の約二,三パーセントが極度に住宅に困窮し，学校，公会堂等の公的施設に一時収容されたまま，あるいは神社仏閣及び壕舎，かり小屋，物置等にかり住居しており，宮城県におきましては腐朽はなはだしく，いずれ疎開を要すべき応急集団施設に四十世帯もの申込みがある実情でありまして，この問題の解決にはきわめて多量の引揚者住宅の建設をしなければならないと思います。宮城県における引揚者集団収容施設は現在十箇所，五百十三世帯，二千二百人でありまして，そのうち樺太無縁故者の住宅が五箇所，二百八十世帯千百人を占め

ております。岩手県は五箇所，千百八十七世帯，四千九百九十七人，青森県は三十箇所，九百世帯で，集団住宅はおおむね兵舎等の旧軍用建物，工場及び工員寮，土木工事の飯場等の転用が主でありまして，住宅として永住するには不向きの上，終戦後の管理，修繕の不十分より，腐朽，破損が多く，また部屋割，炊事場出入口等の改修を必要としなければならないもの」（第008回国会　海外同胞引揚に関する特別委員会　第８号（昭和二十五年十月四日（水曜日）））であった。また，岩手県内の受け入れ先については，「岩手県に参りましては花巻町日居城野住宅，盛岡市の岩鷲寮，青山寮，親和寮」（同前掲）であり，盛岡市青山町が岩手県への引揚者受け入れの中心地であることがわかる。また，昭和25（1950）年に至っても，兵舎の転用で居住しているなど，住宅の劣悪さが指摘され，引揚者向けの新築の住宅が供給された。しかし，その供給戸数は，きわめて限定的であることがうかがえる。

## 5　盛岡市への引揚者のドキュメント

### （１）ＭＴさん（1931年生まれ，女性）

①プロフィール

北海道手塩郡生まれ，樺太では，本川上で暮らす。両親とも宮城県栗原出身である。

②終戦までの樺太での生活

５歳で両親と妹とともに，樺太に移住した。移住後に，弟２人が生まれた。最初，父親は本川上（豊原の近く）の開拓団に入植したが，後に樺太鉄道に勤務した。母は病弱で豊原にあった庁病院に電車で通院した。住まいは官舎だった。食糧事情はあまりよくなかった。コメは非常食として押し入れにしまっていた。主食はじゃがいも，かぼちゃ，そばが多かった。家の近くで野菜を育てた。タラ，コマイ，ニシン，カラフトマスなどが豊富で，父が電車に乗ってよく海に獲りに行った。塩漬けにして土中に保存した身欠きニシンをよくおやつで食べた。シンガポール陥落（1942年２月）のとき，酷寒のなか，樺太でも提灯行列が行われたことを覚えている。高等小学校を卒業し，中学には進学しなかった。

③終戦から引揚げまで

密航船で北海道にわたらないといけない。このまま住むとロシア兵に殺される，女性は髪を切って男装しなくてはいけないなどさまざまな噂が流れた。ロシア兵は恐ろしかったが，目にみえた被害はなかった。日本の憲兵が，スパイの容疑で朝鮮人を川原につれて行き，射殺したという話を聞いた。そうこうしているうちに，ソ連の農民が南京袋一つもってやってきた。日本人が置いていった生活物資があるので，それを当てにしたのだろう。農家は，すぐに引揚げることができたが，鉄道員の家族は，ソ連の国策かどうかで，帰国が遅れた。帰国するまで，ソ連人とひきつづき官舎でいっしょに住んだ。彼らはおおむね親切であった。石炭を上川炭鉱で分けてもらった，商店に並んで，パンを買ったのを覚えている。国民学校を卒業したのち，15，６歳のころ，鉄道の除雪作業でよく駆り出された。徴用で親から離れて真岡のニシン場で働いた。海はニシンで真白になるくらいだった。真岡での住まいは，引揚者が住んでいたもので，タンスや瀬戸物などの家財道具はすべて壊されていた。

④引揚げのとき

1949年の５月に，貨物車に押し込められて，真岡に移動した。そのとき，リュックにつめるだけ，家財道具をつめた。それを思い出すので，いまだにリュクが嫌いだ。土間のテントで

2週間くらいすごした。船中は，ごったがえしで，シラミやノミだらけだった。函館到着後も4，5日間は上陸できなかった。上陸後，頭からDDTの散布を大量に受けた。

⑤帰国後

栗原にある父の実家を訪ねた。父は国鉄の貨物係の職を見つけた。しかし，居心地が悪く，盛岡で引揚者の受け入れ先があると聞き，同じ境遇の人たちといっしょのほうが住みやすいだろうと思い，引っ越した。青山２丁目は騎兵隊跡地で，満州・台湾出身者が，青山３丁目は歩兵隊跡地で，樺太出身者が多く移り住んだ。父は再び，国鉄（日本国有鉄道）で職を得，定年までそのまま勤めた。就職難で，職を得ることができず，2年間洋裁の職業訓練所に通って，短い期間だったが洋裁店に勤めた。母親が病弱だったので，家事をした。厨川にある種畜牧場（現東北農業試験場）に七輪用のカラマツの枝をよく取りに行った。家族パスを使って，栗原にある母親の実家によく食料をもらいに行った。

兵舎跡地は約10畳の板の間をベニヤ板1枚で区切られただけなので，隣がお茶を飲むのもわかった。押入れと窓が一つずつあり，布団はわらでできていた。煙突が低く，ストーブの煙が逆流することもあった。廊下で七輪を使って煮炊きをするので，ときどき火事がおこった。トイレは男女共用で，風呂もなかった。馬小屋を改良してできた青山小学校に仮設のふろを作って，先生が児童を入れたこともあった。

2年ほど兵舎跡に住み，近くにできた「いろは住宅」というアパートに移った。そこも風呂なしで，銭湯に通った。1952年か1953年に，青山町の住宅兼店舗の物件を２万円で購入した。病弱な母親に駄菓子屋でもさせようと，父親が考えたのかもしれない。父は87歳，母は84歳で，そこで亡くなった。

25歳の時に４歳年下の地元の男性と結婚し，最初は同じ町内のアパートに住んだが，青山市営住宅ができたとき（1965年頃）引っ越した。子どもは７人できた。夫は，東京に出稼ぎに出て，60歳ちかくまで，高速道路などの建築現場で働いた。当時は，高度成長の時代で，秋田・青森の人たちといっしょにでかけ，仕事が非常に忙しく，帰省は盆と正月くらいだった。自らも，子どもを保育園に預けて，盛岡駅近くの建設会社で働いた。現在は夫婦合わせて，ひと月10万円程度の年金で生活している。

### （２）ＭＥさん（1935年生まれ，女性）

①プロフィール

樺太の泥川に生まれ小田寒育つ。父は岡山県，母は青森県の出身で，きょうだいは兄が３人，妹が１人の５人兄弟の，７人家族である。

②終戦までの樺太での生活

父は転勤族で，尋常小学校の教員兼魚の燻製の商店も経営していた。北海道出身の，人を雇った。母や病弱だった。食料は海のものも山のものも豊富だった。

③終戦から引揚げまで

終戦時には，屋根に上がって，白旗をあげた。坊主頭にして，山の中に隠れたが，ロシア兵は来なかった。学校（授業）がなくなった。「部屋が３つ以上ある家は，ロシア人が来るので，部屋を貸すように」とソ連の役人から命令された。夜でも，ロシア兵が戸を叩いて家にやってきた。彼らは時計や燻製が好きで，取り上げられた。子どもだったので，彼らが取り上げた缶詰などをもらうことがあった。

そうこういているうちに，兵隊の家族がたくさん入ってきて，帰国までの３年間は，ロシア人と同居した。その間は，１部屋に家族７人で暮らさないといけなかった。ロシア人は大方親切で，近くの子どもたちとよく遊んだ。父は，教員の仕事を失ったので，燻製の仕事とアルバイトで生計を立てた。3年間も，食料には不自由しなかった。次男は，ソ連の兵隊に，蹴っ飛ばされて，列車事故にあい，片足を失った。その兄は，樺太鉄道に勤めた。長男は，何かの都合で，満州にわたった。

④引揚げのとき

1948年6月に引揚げ許可が下りた。真岡まで移動し，1月くらい収容所で待機させられた。その間,子どもがいなくなることがたびたびあった。トイレがとても深く,そこに投げれたとか,ロシア人に渡された，という噂が流れた。函館に到着後，収容所で1月くらい待機した。食料不足で，コーリャンをはじめて食べた。

⑤帰国後

縁故はなく，盛岡で鉄道員の職の募集があり，次兄に連れられてくるように，一家で移住した。盛岡に到着したときは8月だったが，私たち一家は冬のかっこうをしていた。遊んでいた子どもたちは薄着だったので，驚いた。当時，青山は一面りんご畑だった。こっそりいただくこともあった。

青山２丁目の兵舎跡の６畳くらいの間に,一家７人で過ごした。わら布団が１枚しかなかった。同じような部屋に10何人家族も住んでいた。トイレは男女共用，風呂なし，月に1度くらいで銭湯に通った。馬小屋を改造した青山小学校の３年生に３年遅れで編入した。小さな子どもを連れてくる児童もいたので,教室はいつもうるさかった。樺太の方がずっと豊かだと感じた。

5，6年兵舎跡に住んで，その後，近くにできたいろは住宅に引っ越した。厨川中学校を卒業後，洋裁の専門学校の通った。洋裁の内職をやりながら，母が病弱だったので，家事はほとんどやった。兄が西青山にある国鉄が払い下げた官舎を購入した。兄夫婦と同居で，生活もあまり豊かでなかったので，いろいろ確執があった。そこからラムネ工場に勤めた。その後，仙台にある製紙工場に職を見つけ，50代半ばまで勤めた。戻ってきて兄夫婦と再び同居したが，気をつかうので，市営住宅に引っ越した。現在月15万円ほどの年金で生活している。

### （3）ＭＡさん（1930年生まれ　女性）

①プロフィール

樺太の内路生まれ。父は北海道，母は秋田から北海道を経て樺太へ移住した。

②終戦までの樺太での生活

６歳で裕福な親せきを頼って野田へ移住した。父は，林業労働者だった。姉，弟，甥の６人家族で，生活は中レベルで，戦時中以外は，食料に困ることはあまりなかった。主食は，内地米だった。1943年に父が病死した。高等小学校を卒業し，終戦時は，家政女学校に通って，裁縫を習った。みその配給でならんでいる時に，玉音放送を聞いた。電波が悪く，よく聞こえなかった。

③終戦から引揚げまで

1945年8月19日に，14歳以下の子どもは学校に集まって帰国の準備をした。翌20日には，蒸気機関車で持てるものを持って真岡に移動した。しかし，艦砲射撃にあって，帰国船が出発できなくなった。その後，野田に戻ったら，他人が住んでいた。母の実家は，酪農家で食料が

豊富だったので，5，60人もの避難者が泊っていた。何日か経つと，一般のロシア人がやってきた。姉の友人が強姦されたという噂を聞いたり，姉もロシア人につれて行かれそうになったことがあるが,射殺されたなどのひどい話は聞かなかった。何人かのロシア人とは親しくなり，近くに住んでいた将校からは，砂糖やチョコレートをもらうこともあった。豊原と真岡の先生たちが，野田に分校をつくって，そこに通った。野田の製紙工場には，世界に何台かしかない機械があったので，他の地域と比べると，被害が小さかったのかもしれない。

④引揚げのとき

ロシア政府からの帰国許可を得るために，吉田という通訳に，裏で金か銀かの指輪を渡したが，横領された。姉の仕事の都合で，帰国が遅れた。1947年11月に北鮮丸で真岡を発った。収容所では，学校の教室を仕切って，2畳くらいのスペースに，7，8人が詰め込まれた。眠れることはなく，そこで2週間ほど過ごさなくてはいけなかった。収容所では，裁縫仕事をさせられた。姉は看護婦の仕事をさせられた。パスポートに子どもを記入するのを忘れた人がいて，荷物をすべて捨てて，その子を角巻の中に入れて，ロシア人官吏の目を通り抜けたのを見た。船底に詰められ，船酔いがひどく，3，4日間は水も飲めず，トイレにも行かなかった。シラミがそこらじゅうにいて，不衛生だった。

⑤帰国後

函館に上陸後，大槌町に住んでいた腹違いの兄を頼って盛岡に移動した。その兄は，東京では，旋盤工をしていたが，当時は仕事がなく海産物のカツギ屋をしていた。市内の三戸町に部屋を借りた。樺太と違い，ストーブはなく練炭こたつで，戸にガラスでなく障子が張ってあって，田舎で貧しいところだと思った。当時は就職難であったが，映画館の案内係の仕事口を見つけた。家にいると寒いので，朝早く出勤した。初任給は800円だったが，少しずつ上がって一家を支えた。当時はそれが当たり前だったので，つらいとは思わなかった。縁故者は無縁故者と違い国や市からの補助をもらえず，かえってしんどかった面もみられる。20歳を過ぎて一度東京へ出たが，肌に合わず戻ってきて，24歳で小さな飲み屋に勤めた。どうせ働くなら，大きいところの方がいいと思い料亭に移り，25歳で結婚した。子どもは事情があってもうけなかった。その後，63歳まで，店は変えたが水商売をつづけた。現在は夫婦あわせて月26，7万円の年金で生活している。25歳のとき家族の影響で入信した創価学会の信仰と友人と食事をすることが生きがいである。

### (4) SHさん (1938年生まれ，男性)

①プロフィール

樺太の野田生まれ。日露戦争後の1905，6年に，秋田出身の祖父母が移住してきた。

②終戦までの樺太での生活

日露戦争後，漁協をやっていた祖父母が野田に入植した。密林や沼地1,000町歩（約1,000 ha）を開墾した。祖父母，両親，6人兄妹（本人は3番目），それに叔父の11人家族だった。父は酪農を営み，牛を15頭くらい飼っていた。人口を7,000人程度かかえていた野田の街からは3 kmくらい離れていて，牛乳はよく売れ裕福だった。主食は内地米だった。日本政府が樺太を米の備蓄基地にした影響もあり，不自由しなかった。じゃがいも，麦，ビートなどの作物も豊かだった。なお，10年ほど前，現地の役所に行った時に，土地所有の名義があることを確認した。

③終戦から引揚げまで

終戦時に，引揚げる覚悟をしていたのか，父母が札を服に縫い付けて隠して持ってこようとしたのを覚えている。真岡が艦砲射撃を受け，大火事になっているのを見た。消防団を軍人と間違えたのか，ロシア兵に機関銃で射殺されるということがあった。その後，北樺太からロシア人が移住し，日本人の家に間借した。日本人とのいさかいが絶えず，治安が悪化した。ロシア兵は，階級が高い者はそうでもなかったが，低い者には悪さをするものが多かった。戦中と戦後も，小学校に通って，ロシア人ともいっしょに勉強した。彼らは，掛け算など簡単な計算ができない者も多く，また，大人はあまり働いていないようだった。40万人くらいのロシア人が，日本人の物資を当てにして南下したが，めぼしいものがなくなり設備が古くなると，修理せず大陸に帰国したので，人口もだんだん少なくなっていった。現在も，道路がでこぼこだったり，港に沈んだ船がそのままになったり，状況はあまり変わっていないようだ。

④引揚げのとき

ソ連国籍でないと定住できないことを知らされ，1947年10月に帰国することにした。ソ連の所有物なのだから，家を壊したり，焼いたりすることは禁じられた。彼らにしたら，日露戦争の時，日本に奪われたものを奪い返したということのようで，そのように子どもたちにも教えていたようだ。真岡から函館まで，帰国船は宗谷丸だった。真岡で，何日か待たされた。貴金属は税関で没収されるので，あらかじめ，地位が高い役人にルーブル紙幣で賄賂を渡した。函館に着いて，シラミがたかっているので，頭からDDTを散布された。その時に，持ち込んだダイヤ，金の指輪，ルーブル紙幣などすべて没収された。外務省に何度も返還の請求をしたのだが，戻ってこなかった。これは，避難民から国が略奪したのと同じで，国際法違反である。引揚者から日本政府が没収した財産は，裏でロシアへの賠償に使われたと思っている。

⑤帰国後

道南（北海道南部地域）の岩内町に住んでいた親戚のいるアパートに一時的に疎開した。そこでは8畳間に家族4人が住んでいたが，さらに10人加わったので，歩く場所もない立ったままの生活が何日か続いた。先に帰国した，叔父家族は，栄養失調で餓死した。その後，いまの泊原発がある茅沼炭鉱に引っ越し2年間住んだ。2年間学校に行ってなかったので，1年年下の学級に編入された。引っ越した翌年，母親が過労と心労がたたったのか亡くなった。父親が炭鉱で働いたお金で，蘭越に山と畑を買った。中学を卒業し地元の高校に入学したが，授業料が払えず退学し，夜学に入りなおした。卒業後，盛岡に住んでいた引揚者の叔母を頼って家族と離れて，ひとりで盛岡に来た。印刷会社に住み込みで働いて修業した。そして，1966年に独立した。

1986年に，大阪に本拠がある全国ネットの「自分史サークル」とフランチャイズ契約をした。引揚者の団体と知り合い，毎年開かれている「語り継ぐ会」で講演を頼まれた。それが縁で，岩手県引揚者団体の役員になった。1967年に設立したときは，満州・朝鮮・樺太・千島あわせて県内に1万1千あまり世帯いた。団体の役員をやっていて，満州と樺太引揚者では感覚が違うと感じた。満州はもともと中国人が生活していたところに自分たちが住み着いたのであって，樺太はすべて自分たちが一から開拓したので，よその国を侵略したのではないという意識が強い。それに，満州の人たちは，自分たちのことばかり言うことが多かった。高齢化が進み，昨年，法人から任意団体に変更した。樺太引揚者の全国団体や野田からの引揚者の会も昨年解散した。

現在も印刷会社を経営し，月35万円程度の収入で生活している。

## 6　いくつかの考察

本論では，樺太から岩手県盛岡市に引揚げてきた４つのファミリー・ヒストリーから，若干の考察を加えたい。

第一に，岩手県は，無縁故の引揚者を受け入れた県として注目されるが，岩手県に定住した引揚者の中には，有縁故として引揚げたファミリーもみられるということである。この人たちは，家族親戚の縁故を，たよったものであるが，この人たちの場合も無縁故者と同様に，住宅に困窮していた。しかしながら，有縁故であるがゆえに，住居の手当てを受けられないという立場に置かれた。具体的には岩鷲寮には，有縁故の引揚者は，入れなかったのである。

第二に，青山町の中には，引揚者住宅「青山寮」（1946年開設）と「岩鷲寮」（1947年開設）が開設されたが，樺太からの引揚者は，後者の岩鷲寮に入った。満州からの引揚者も，同様に，無縁故の引揚者であったが，受け入れ当初から，仕分けられたようである。

第三に，敗戦から引揚げのまでの労苦は，すべてのファミリーに共通して，きわめて深刻でたいへん厳しいものがうかがえるが，その厳しさの原因は，ソ連兵の侵軍だけではない。日本軍や憲兵によるものや，出入国の手続きや扱いによるものも大きな要因であることがうかがえる。日本の官憲や住民による，朝鮮人虐殺があったかどうかは，論争の一つの焦点となっているが，今回調査したファミリーの中には，虐殺があったことをみぢかに感じたことが語られた。敗戦後は，ソ連に対して女性が恐怖を感じ，男装したり，山間地に疎開したりした。また，子どもは，出航前の収容所の便所が恐怖で，深く掘られた汲み取り式のトイレから落ちたならば命を失うという恐怖の中で，出航船を待っていたことがうかがえた。

第四に，少なくとも今回の調査で知る限りにおいて，ソ連兵とは違って，戦後に南下して，日本人住宅に入居してきたソ連（ロシア）の民衆は，概しておおらかで友好的であったようだ。戦争が両国民を引き裂き，政治のレベルでは互いに侵略者と非難し合ったが，民衆レベルでは充分に共存できることがうかがえた。戦争と政治が，両国民を引き裂いたままに，放置したのである。

第五に，帰国後の引揚者の生活の困窮は，少なからず長く続いた。戦争によって教育機会が閉ざされたために，引揚者はしばしば，底辺の労働者の地位に置かれたのではないか。確かに，引揚者の中には成功した人の例もみられるが，相対的には貧困の階層に固定されることのほうが多かったのではないかと想像される。

最後に，本調査は，麦倉哲と三井隆弘（岩手大学）が，2010年から2011年に実施したものである。調査に協力して下さった引揚者の皆様ならびに三井隆弘氏にはここに記して謝意を表したい。

**＜参考文献・サイト＞**

飯田和夫『激動の樺太より生きて祖国に帰還して』鳥影社，2004年

岩手県『援護の記録（岩手県戦後処理史）』岩手県，1972年

岩手自分史発行センター『岩手自分史サークル』NO.38，岩手自分史発行センター，2011年

樺太庁『樺太庁施政三十年史』樺太庁，1936年

厚生省引揚援護局編『続・引揚援護の記録』厚生省，1955年
厚生省援護局編『引揚げと援護30年の歩み』厚生省，1977年
佐藤博蔵『有限会社博光出版　35年の軌跡』博光出版，2002年
衆議院「第008回国会　海外同胞引揚に関する特別委員会　第８号」（昭和二十五（1950）年十月四日（水曜日））（https://kokkai.ndl.go.jp/simple/txt/100803932X00819501004）
写真集「望郷樺太」編纂委員会編『望郷　樺太』国書刊行会，1979年
セレニ・コンスタンス「1950年代の引揚げ---抹消されることを拒む人々」『アルザス日欧知的交流事業日本研究セミナー戦後」報告書１未帰還者の問題』（発刊年不詳）
創価学会青年部反戦出版委員会『北の海を渡ってー樺太引揚げ者の記録』第三文明社，1976
函館市『函館市史』デジタル版，2008年４月１日版，2008年（http://www。city。hakodate。hokkaido。jp/soumu/hensan/hakodateshishi/tsuusetsu_04/shishi_06-00/shishi_06-00-01-00-04。htm）
函館引揚援護局『函館引揚援護局史』函館引揚援護局，1950年
林えいだい『＜増補版＞証言・樺太朝鮮人虐殺事件』風媒社，1992年
広田純「太平洋戦争におけるわが国の戦争被害 ――戦争被害調査の戦後史――」『立教経済学研究』第45巻 第４号，１～20頁，1992年穂垂政夫『青山町50年の軌跡』博光出版，1997年
向井田郁子「〈あおやま銀河ステーション夢地図模様〉７　軍都の遺跡つづき」『盛岡タイムス』（2005年１月15日，１月22日，１月29日，２月５日，２月13日，２月20日，２月27日，３月６日，３月13日，３月20日号）盛岡タイムス社，2005